

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	[一等當選]五拾周年記念祭歌：部報
Author(s)	弘津，正二
Citation	龍南， 2 3 8： 1 5 4 - 1 5 6
Issue date	1937-10-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7444
Right	

かり。五高軍七人氣を揃へて、一本一本のオールに全精力をこめた。やがて瀬田の唐橋。橋も落ちん許りの人の黒山。ピツチは同じ三十五。兩クルー必死の頑張り。五高クルーの深い確實なオール、ぐんぐん六高を抜き、遂に三艇身半の差で此處に中原の鹿を射止める。ゴールインの刹那、整調原口の目には涙が浮んでゐた。苦節十年。今ぞ覇業なる。優勝旗を受取る若尾主將の手は感激にふるへ、泰・栗山のミツテルパールはその堂々たる巨軀を小刻みに動かしてゐた。

クルー名次の如し。

	身長	体重	胸圍
舵手 雄郎	1.64	56	83
整調 直彦	1.68	61	88
五番 戸口	1.70	60	87
四番 泰一	1.75	64	89
三番 栗山	1.70	67	95
二番 佐藤	1.70	63	89
(主) 若尾	1.67	63	87
監督 大坂			
コーチ 小島			
ヤ (阪大生)			

優勝旗を先頭に宿所へ歸る時、思はず口を衝くのは「不知火燃ゆる西海は。」であつた。途中で高知の諸君が拍手で送つてくれた。

(附記)

この優勝は、實に諸先生並びに先輩の賜で、それなくして何であの微力で勝つたでせう。尙、四高は瀬田で試合前選手が一名死んださうで同情にたへない。我がクルーを分解するに、漕手六人の中、三人は熱にもえたつ陽の人、他の三人は心中火を抱いて外に表はさざる陰の人、ヨックス深江はその中間をゆく圓満な人であるのも一參考となると思ふ。技術、体格共に他校に優れぬ五高があつたベカサスにも似た活躍は、五高魂の權化と云ふべきである。筆者に推敲の能なく死筆よくあの日の感激の萬分の一も寫せないのを遺憾に思ふ。(完)

五拾周年記念祭歌

文二乙 弘津 正二 (作詞)

(一) 松樹の翠いや深く

星霜玆に五拾年

齡と共に赤壁の

(二)

誇も高き我學舎
夕闇こむる武夫原に

龍田の山の松嶺に

思は遠く其の上の

過ぎにしかたを偲ぶ哉

(三)

雄飛せし空大鵬の

圖南の思慕はしや

自由の鐘の音冴えし

面影今も薫りつゝ

(四)

時代の波は立ち騒ぎ

思想の嵐荒むとき

白川流れ永遠に

龍田の緑變る無し

(五)

眞理求むる若人の

胸の情熱は大阿蘇に

無限の暗示受けにつゝ

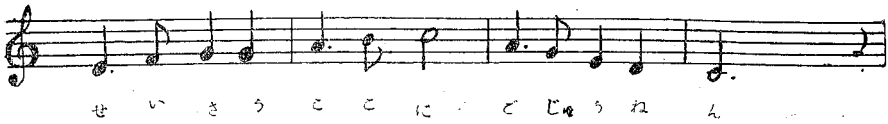
新たなる日を息づかん

(上田英夫教授選)

創立五十周年記念祝歌

(A)

作詩 文二乙 弘 津 正 二
作曲 理一甲一 吉 野 重 治



(B)

作詩 文二乙 弘津正二
作曲 理三甲三 植田哲郎



しやうじゅの みーどり いやふか



せいさう こーこに ごじゅーねん



よはひと ーもにせーきへきの



ほこりも たーかきー わががくしや

歴代雑誌部々長及び 委員氏名

(一) 部長

昭和十二年現在	大正十二年マデ	大正九年マデ	大正八年マデ	明治四十年マデ	明治三十四年マデ	明治三十二年マデ	明治三十年マデ	明治二十六年マデ	明治二十四年マデ
八波則吉教授	澤瀉久孝教授	高木市之助教授	本田弘教授	高木敏雄教授	兒島獻吉郎教授	黒本植教授	内田周平教授	大瀨甚太郎教授	大瀨甚太郎教授